

「地域」が生まれる原点

①自然環境

- ・人間は周囲の自然に適応しつつ、そこから生活資源を獲得し、その結果として自然を作り変えて「環境」化しながら生きる存在。
- ・地表上の自然には違いがあるため、人間の環境適応と資源獲得の様式＝「生活様式」にも違いが生じ、それが多様な文化景観に表出し、目に見える「地域システム」の外見的様相を生み出す。

②経済原理

- ・現代の資本主義社会においては、社会的事象の多くは、経済競争の原理を無視しては成立が難しい。
⇒ 現代(近代以降)の「地域」の変化や形成のあり様＝「地域システム」は、好むと好まざるとにかかわらず、また知らず知らずのうちに、「経済原理」に影響されている。

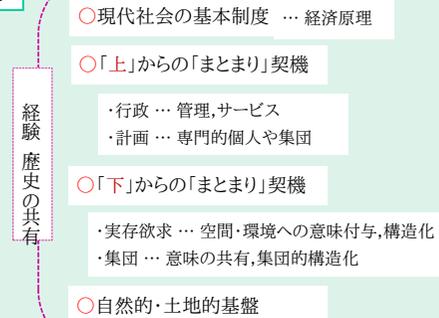
③制度・計画原理

- ・しかし現代社会においても、「地域」事象のすべてが「知らず知らず」のうちにできるわけではない。それどころか、完全な自由競争の中で「地域」が生まれるというケースは、むしろ少ない。
- ・経済競争を誘導したり枠づけたりする法律や条例などによる「規制」が介在する。
- ・そのため、「規制」に関する専門知識を身に付けた専門家や企業が、周到に「計画」して作り出す「地域」も少なくない。

⑤経験・歴史の共有

- ・地域形成のもう一つの原点 … 大災害の経験が語るもの
- ・経験と歴史の共有は、普段は意識されなくても、自分が直接経験しなくても、地域感情の醸成や地域づくりの理念を探究する際の原点、シンボル、つまり「よりどころ」となる。

構図



★各原理はからまりあって地域の「まとまり」現象とその仕組み＝「地域システム」を形成。

・「からまり」のあり様
⇒ 「地域性」

④「実存的欲求

- ・では、人間は常に自然や経済や制度に枠づけられて生きるしかない存在なのか?
… そうでもない。
- ・近代経済学や様々な計画制度が誕生する前から人間は存在したし、自らの自主的な判断と工夫で生きてきた。

- ・何より、人間は、周囲の環境に自分なりの意味を付与して秩序立て、その中に自ら帰属する「場所」を造らなければ生きられない。
- ・「生きる」こと = 環境の中に自らの「場所」を定めること

… 個人の存在基盤としての場所を、自らの主体的なかかわりを通して「構造化」して生まれる空間＝「実存空間」

※このスケールでは「地域」よりも「空間」がfit

- ・個人の安全にかかわる家族や町内・集落といった「基礎集団」のレベルでも、それと同類の「実存空間」としての面をもつ。
… そうした「実存空間」にはどんな「システム性」がみられるだろうか。

・こうした個人的・基礎的な地域や空間は、日々の仕事や生活の無意識的な「背景」の部分を構成していることが多い。

・そして「無意識」であるため、日々の生活では忘却されている場合も多い。

・個人や近隣の平常が災害や事件等で脅かされたり破壊された時、それが「場所」や「地域」からの「疎外(感)」となって表出。

⇒ こうした問題には、民俗(族)学や社会学が関心を向けるものが多い。

「生きられた空間」



★個人の部屋、引き出しの中にさえ、その人の興味関心、美的感覚、生活行動を反映した要素の配列と連関構造もつシステム空間が!



・こうした私的空間における諸要素のシステムの配置は、事前に決まっていたり誰かに差図されるのではなく、個人の欲求に即して状況にあわせて生み出されるもの。
 ・その意味で「実存」的といえる。

・このような原初的、あるいはミクロスケールでは、「地域」というよりも「空間」システムと呼ぶほうが、日本語の語感としては適切といえる。

・自然現象のまとまりに比べて、人為の所産はうつろいやすいが、少なくとも一定期間、継続状態にある事象は、システムの諸関係の所産であるといえる。
 ※「うつろい」の様相もまたシステム

・他人からはカオスにみえても、また当事者にさえ気づかれなくても、人為の所産には必ずシステム性があり、「完全なカオス」の状況はまずないとみてよい。

・次に、個人の生活や安全に直接かかわる「家」と集落などの「基礎的集団」のレベルにおける、状況にあわせた人々の無意識的・伝統的ななかかわりから生み出された空間のシステムの構造化の例をいくつかみてみる。

・これらの事例は、その由来も気づかれなくなった旧来の社会規範や人々の心性を探り当てようとする民俗学や文化地理学の研究対象とされ、明らかにされてきた。